

謹訳
林源氏
物語
望三



祥伝社

謹 源 林
氏 望
物 語
一

常州大学图书馆
藏书章



祥伝社

林 望 (はやし・のぞむ)

1949年東京生まれ。作家・書誌学者。慶應義塾大学大学院博士課程修了。ケンブリッジ大学客員教授、東京藝術大学助教授等を歴任。専門は日本書誌学、国文学。『イギリスはおいしい』(文春文庫)で日本エッセイスト・クラブ賞、『ケンブリッジ大学所蔵和漢古書総合目録』(ケンブリッジ大学出版)で国際交流奨励賞、『林望のイギリス観察辞典』(平凡社)で講談社エッセイ賞を受賞。近著に『節約の王道』(日本経済新聞出版社)、『リンボウ先生のうふふ枕草子』(祥伝社)がある。『恋の歌、恋の物語』(岩波ジュニア新書)、『夕顔の恋』(朝日出版社)等、『源氏物語』に関する著作、講演も多数。エッセイ、小説のほか、歌曲の詩作、能評論等も多数手がける。

公式ホームページ <http://www.rymbow.com>

謹訳 源氏物語 一

平成22年3月25日 初版第1刷発行

著者——はやし・のぞむ 林 望

発行者——たけうちかずよし 竹内和芳

発行所——しょうでんしゃ 祥伝社

〒101-8701 東京都千代田区神田神保町3-6-5

☎03 (3265) 2081 (販売部)

☎03 (3265) 1084 (編集部)

☎03 (3265) 3622 (業務部)

印刷——図書印刷

製本——ナショナル製本

ISBN978-4-396-61358-7 C0393

Printed in Japan

祥伝社のホームページ・<http://www.shodensha.co.jp/>

©2010 Nozomu Hayashi

造本には十分注意しておりますが、万一、落丁、乱丁などの不良品がありましたら、「業務部」あてにお送り下さい。送料小社負担にてお取り替えいたします。

謹
訳
源氏物語

一

桐壺	5
帚木	51
空蟬	135
夕顔	157
若紫	247

装

訂／林望

本文デザイン／祖父江慎（コズフィッシュ）

桐壺^{きりつぼ}

さて、もう昔のこと、あれはどの帝の御世であつたか……。

宮中には、女御とか更衣とかいう位の妃がたも多かつたなかに、じつはそれほど高位の家柄の出というのでもなかつた桐壺の更衣という人が、他を圧して帝のご寵愛を独占している、そういうことがあつた。

女御ならば皇族または大臣家の姫、更衣ならば大納言以下の貴族の娘と決まつたもののゆえ、その並々ならぬ家柄の女御のかたがたからみれば、我をさしおいて桐壺の更衣ごときがご寵愛をほしいまにするなど、本来まことにけしからぬ話、とんでもない成り上がり者と、あしざまに罵らずにはおられない。

まして、同じくらの家柄、もしくはそれ以下の出自の更衣たちともなれば、心はいよいよ穏やかでない。

が、帝はそのようなことには頓着されないから、朝に夕に、この桐壺の更衣をお呼

びになる。そこで、お仕えするために参上すると、もうその度に、あたりの女たちの嫉妬心は燃え上がり、満々たる恨みが、その人の一身に積もり積もったのであろうか、とうとう病がちになり、だんだんと心細い状態になって、とかくは実家のほうに下がって過ごしているということが多くなった。

すると、逢えない分、帝のご執心はまさり募って、どうしても逢いたいと、いっそうご寵愛が急になっていくので、周りの人々がどれほどこの更衣を誹謗しているかということまでは斟酌されるゆとりもなかった。まさに、一国の主が女色に迷って国の乱れを惹起したという歴史上の例話にもなるようなご惑乱ぶりであった。

上達部、殿上人など、帝を輔佐する高官たちも、まったく困り果て、目引き袖引き、この惑乱ぶりはとても見ていられないと噂しあつたほどの、ご執心ぶりであつた。聞けば、唐国にも、こういう色好みがもとで、ついには内乱沙汰にまでなつたという良からぬことがあるというから、この体たらくではまったく困つたものだとな下の人々はみなこのことを苦にして、かの楊貴妃の例なども引きあいに出されるようになっていった。

桐壺の更衣にとつては、いたたまれないような事が次々と起こつて辛いばかりの日々であつたが、それでも、帝のもったいないお心のまたとない愛しみ深さばかりを、せめての心のよりどころとして、かろうじて宮中の交わりをしていたのである。

この桐壺の更衣という人の父親は、大納言であつたが、すでに亡くなり、母親きたの方かたは、それなりに由緒ある家柄の出自で教養もあるという生まれ育ちであつたから、今も両親が揃そろつていて世間の評判も華々しい妃きさきがたにもおさおさ劣ることのないように、あれこれの儀式の用意などはしていたが、とはいつても、父のない身の上では、これに代わるしかるべき後うしろ楯たても持たなかつたので、とくに正式の行事などのときには、やはりどこかたよりなく心細こまげに見えた。

が、前世からの因縁であろうか、それもよほど深い契ちぎりがあつたのであろう、ただご寵愛深かつたばかりか、この世ならぬ美しさの、玉のような男君まで生まれたのである。

まだか、まだか、と氣を揉もんで出生を待ち望んでおられた帝が、生まれたとの報ほうに駆けつけてごらんになると、その若宮のいや美しいこと、この世にはたぐいなきばかりであつた。

帝にとつては、しかし、この男君は二番目の君であつた。第一の君は、右大臣うだじん家出身の弘徽殿きくきでん女御にようしの産うんだ御子みこで、こちらは祖父が現役の右大臣という後ろ楯も重々しく、まったく疑いもなき日嗣ひつぎの御子と世間では大事に大事にお仕えしていたけれど、しかし、この桐壺の更衣の産うんだ御子の美しさには、とても肩を並べることができない。そのため、帝は、一の君のほうはそれなりに丁重ていじゆうに慈いづしまれはしたけれども、こ

の二の君ばかりは、なにをさておいても心ゆくまで情をかけ、かわいがって育てられることは限りがなかった。

この桐壺の更衣という人は、四六時中帝の身のお世話をするありきたりの女というような身分ではなかった。美しい女として世間の評判も並々ならず、それなりに高貴の身分の女らしい風情を帯びているのではあったが、いかんせん帝が、ともかく年中お側近くに置きたがつて、宮中のしかるべき行事に管弦の樂を奏する折々や、その他何事にもあれ、重要な事のある時々には、誰をさしおいても、まずこの更衣を身辺にお召しになる。

ある時は、夜の闇にお召しになって、本来はすぐに局にお返しになるべきところ、そのままずっと手放されないなど、無理を承知で、お側を去らせずに居続けさせるというようなことがあって、結果的に、なにか輕輩の女房のように見えるということもあったのだが、さすがに、この男君の生まれた後は、そういう無分別を思い改められて、しかるべき格式に従って待遇されるようになった。

そのため、弘徽殿女御のほうでは、あるいは万一にもこの二の君が自分の息子を差し置いて立太子するとうようなことがあるかもしれない、と疑心暗鬼になってくる。けれども、この女御は、人に先駆けて真っ先に入内し、帝のご寵愛もなまなかのものではなかったし、それゆえ御子たちも何人か儲けていた関係で、帝は、この弘徽殿

のお方の諫めばかりは、やはりいつも氣にかかつていて、桐壺の更衣とのことについては、心苦しいことに思いもし、言い訳もされなどするのだった。

桐壺の更衣は帝のご寵愛だけが頼りであつたが、まわりじゅう敵ばかりで、あれこれあげつらう人も多く、またその身は病弱でいつ命が絶えぬものとも限らない。そういう日々を送りながら、かくてはいつそ帝のご寵愛などないほうがよかつた、とまで考え込んでしまふのであつた。

更衣の局のあつた桐壺は、帝のご寢所からはもつとも遠い東北の隅なる別棟の御殿にある。だから、帝がお渡りになるとときには、数多い女御や更衣たちの局の前を素通りしていくことになり、それもひっきりなしにお通いになるわけだから、あまたのお妃がたが心を痛めるのもむべなるかなというところがあつた。

また反対に、帝のお召しに應じて桐壺の更衣のほうから参上する、それもあまりにも度重なるという折々には、架け渡した板の橋のところやら、あるいはそこを通らずには行かれない渡殿（渡り廊下）のところやら、ともかくそこかしこに、とんでもない汚物がまき散らしてあつたりして、更衣を送り迎える女房たちの裾が、堪え難い悪臭にまみれるというようなことすらあつた。

そうかと思うと、御殿の中ほどの廊下を歩いているときに、その前後の戸に錠を鎖してしまつて、あつちとこつちで申し合わせて進退谷まるような目に遭わせるという

ことも少なくなかったのである。

こうして、何かにつけて、数えきれないほどの苦しい目に遭わされたので、更衣はなにもかも悲観して萎返しおっている。すると、帝はその様子をますますいとおしく思われたのであろう、ご寢所のすぐ隣にある後涼殿こうりやうでんに住んでいた更衣の局をほかに移転させて、代わりに桐壺の更衣の上局うへつぼねとして下された。そういうことをされたのでは、追いやられたほうは恨み骨髓、なんとしても晴らしようのない憤懣ふんまんを抱かずにはいられない。

さて、この二の君が三歳になった年の御袴着おんはかまぎの儀に際しては、一の君の出で立ちに勝るとも劣らず、それこそ内蔵寮・納殿くろくさき おさめどのに襲藏しゆうざうされた宝物を尽くして、おどろくほど立派に執行しつこうされたのであった。それにつけても、世の中の人々の間には、不適切なことだと批判する声のみ多かったけれど、とはいえ、この御子がしだいに大人びていくにつれて、その姿形の美しさといい、性格の立派さといい、この世のものとも思えないくらい素晴らしかったので、お妃たちは、あの女は憎いけれど、この御子ばかりは、どうしてもどこか憎めない、と思ってしまうのである。それどころか、世間の道理を知り尽くした人ともなれば、へなんとまあ、こんな人も世の中に生まれ出てくるものなのですねえと、驚き呆あきれつつ目を瞠みはるばかりであった。

その年の夏、皇子を産んでいまは御息所みやすんじやうと呼ばれるようになった桐壺の更衣は、

我が身ながら、この先頼りない気持ちになるほど体調が悪くなり、お暇を頂戴して里へ下がろうとお願ひしてみるけれど、愛着する帝はどうでもお許しにならぬ。いや、もうここ何年と、ずっと病がちであった更衣のこととて、帝は、いつものことだと軽く考えておられ、

「もう少し、ここで養生したらよい」

とばかりおっしゃっているうちに、日に日に容体は重くなり、わずか五日六日たったころには、もうひどく衰弱してしまった。

更衣の母は、泣きながら帝にお願いを申し上げて、やつのことで里に下がることを許された。

そういう里下りの折にさえ、もしそこに我が子を同道していたら、万一にもまた恥をかかされるような嫌がらせがあつたときに、ほかならぬ御子に恥をかかせることになる、と、そこを案じて、あえて御子は宮中に留め、ほんの身近な人々のみを連れてひそかに退出したのである。

もう死も近い者を宮中にいつまでも引きとどめてもおかれないのだから、最愛の更衣と別れるのはやむを得ないけれど、だといって、その別れの日に見送つてやることもままならない、その不安な思いを帝はいいようもなく思われる。

退出する直前、更衣の様子はなお匂うように美しく、またかわいらしいのだが、そ

れが病のせいでひどく面やつれして、こんなふう to 今生の別れをしなければならいことを、ああ悲しい、と心に沁みて思いながら、あらわな言葉に出して帝に申し上げることもできず、ただ、もう朦朧と意識も薄れゆく様子であるのを帝はご覧になって、もはや前後を忘るる取り乱しようであった。

そうして、あれやこれやと泣きながら約束などなさろうとするけれど、更衣はまったく答えることもできない。その眼差しは熱に浮かされたようにボオツとして、全身からにわかに力が失せ、いよいよ意識不明の状態に臥せているので、帝は、ただおろおろと、どうしたものか、どうしたものか、と惑っておられる。

いったんは輦車にて退出して良いという宣旨を発しておきながら、未練断ち難く、また車を引き込ませては、どうしても、なんとしても、手許を放ちやることができない。

「ああ、ああ、この限りある命の、その限りの道にだって、どちらが先に、どちらが後にといいことなく、いっしょに旅立とうと約束したではないか、それなのに、どうしておまえは、私をここに残して……そんなふう to 私を残して一人だけ里へなど行かれやしないだろう、な、そうだろう」

と叫ばれる。さすがに、瀕死の更衣もあまりにも悲しいと思ったのであろうか、

「限りとして別るる道の悲しきに